

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム えがおの花大釜(すみれ)

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0392100103		
法人名	株式会社 アルテライフ		
事業所名	グループホーム えがおの花大釜(すみれ)		
所在地	〒020-0763 岩手県滝沢市大釜大畑72番地6		
自己評価作成日	令和5年11月22日	評価結果市町村受理日	令和6年3月11日

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

自分の家族を入居させたいと思えるような施設を目標に、入居者様やご家族様とより良い関係を築けるよう心掛けています。職員が全て介助するのではなく、共同生活の中でその人の役割が持てるよう、色々な事を職員と行ってみたりします。各ユニットごとに誕生日会を開き、希望の誕生日メニューのお食事を提供したりしております。新型コロナウイルス感染予防の為外出を控えているので、施設内で体を動かせるように午前はラジオ体操、午後はおぼろ先生のDVDなどを使い歌に合わせて体操を行っております。その他に施設の畑でトマトや人参、サツマイモ等のいろいろな野菜を入居者様と一緒に育て収穫し、食事に使ったりなどもしております。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 [https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action\\_kouhyou](https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou)

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

盛岡市に隣接した国道46号にほど近い新興住宅地の一角にある2ユニットの事業所である。地元自治会に加入し、資源回収などの地域活動に現在は職員のみが参加している。また、滝沢市との連携により、福祉ボランティア祭り、オレンジカフェ、認知症まちかど相談室などの活動にも事業所として参加している。居室担当制をとっており、担当職員が家族との連絡を密に行い、家族の意見要望を把握するとともに、1ヵ月間の利用者の様子をA4版1枚に手書きで記載の上写真を添えて送付し、家族から好評である。コロナ禍で外出等を控える中で、ユニット毎の敷地内畑での野菜づくり、ミニドライフ、ペランダでの外気浴等気分転換を図るように工夫している。コロナ禍以前に受け入れていたボランティアについて、今後再開の時期を検討することとしている。

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年12月13日

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

事業所名 : グループホーム えがおの花大釜(すみれ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	目に付く場所に掲示し意識付けを行っている	事業所の基本理念を「縁」とし今までの縁も、これからの縁も大切にする暮らしを念頭に、日頃のケアに取り組んでいる。理念に基づき作成された運営方針を毎日の朝礼で唱和するとともに、ユニットごとの行動計画を作成し、達成状況に応じてさらに新たな行動計画へと繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入している。地域主催の福祉ボランティア祭りなどにも参加した	自治会に加入し回覧板から地域の情報を得ている。コロナ禍以降資源回収には職員のみが参加している。チャグチャグ馬っこ当日は見学できなかったが、事前のイベントには利用者数人が見学に出かけた。管理者は市主催のまちかど相談室への参加、他グループホームと合同のオレンジカフェ、さらに今年初めて福祉ボランティア祭りに参加している。コロナ禍以前はボランティアを受け入れ利用者と交流を深めており、今後再度の受け入れ再開の時期を検討することとしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	オレンジカフェなどの参加や、認知症まちかど相談室など滝沢市から依頼され行っています		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナウイルスの感染状況を加味しながら開催をしており、意見や要望等をユニット会議内で報告し向上に活かしている	今年度は2か月に1回、対面で開催している。以前は避難訓練実施や敬老会と同時開催していたこともある。メンバーの参加しやすさを考慮し、19時から事業所とは別の会場で開催している。自治会長、民生委員、地域包括支援センター、駐在所警察官、JAライフサポート職員、家族等がメンバーとなっている。利用者の出席については現在検討中であり、また家族の持ち回り出席については今後家族と相談することとしている。職員は出席していない。会議では利用者の状況、ヒヤリハットについて報告をしている。	開催時間のこと、家族の持ち回り参加のこと、利用者の出席については事業所としても課題意識を持ち検討することとしていることから、関係機関と協議の上前向きに検討することを期待します。さらに、人材育成の観点からも、職員の出席についても検討願いたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当課・地域包括支援センターと連携を取りながら協力して頂いている	運営推進会議には、市直轄の地域包括支援センター職員が出席しており、情報交換、相談助言を得る機会としている。高齢者支援課、生活福祉課との連携は随時情報交換できる体制にある。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム えがおの花大釜(すみれ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	眠りSCANやセンサーなどをご家族様に使用の説明と理解を得て、見守り機器を使いながら夜間柵などをしないようにしている。施錠に関しては、来客の方が検温をせずに入らないようユニットと玄関をつなぐドアは掛けている。特定の入居者様は窓から出ようとする方がおり、ご家族様了解のもと窓を開けないよう鍵を追加している。	身体拘束適正化委員会は、管理者、各ユニットリーダーで構成され、3か月ごとに研修も兼ねて開催し、議事録は職員に回覧するとともにユニット会議でも報告している。転倒の危険性のある利用者には、家族に説明の上、人感センサーや眠りスキャンを使用し転倒を未然に防ぐように取り組んでいる。また、日頃のケアの中でスピーチロックがみられた場合には、管理者が個別に指導するとともに、ユニット会議で対応方法について検討している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	肉体的には勿論だが、入居者に対しスピーチロックなどを行わないよう職員にも共有してもらっている		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	先々必要性があると判断した場合は家族に相談したり制度の説明をしたり、活用に向けて検討していただいている		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前にパンフレットや資料にて十分説明をし、了承を得た上で契約を結んでいる		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	各入居者様に担当が付き、ご家族様にもお手紙や電話などでお話などを行っている。生活の中で聞かれた要望や意見などは職員間で共有しケアの向上に努めている	居室担当制をとっており、毎月1回スナップ写真を貼付の上で利用者の日常の様子等を記載して家族に送付し、好評である。また、担当者や家族は日頃から連絡を取りやすい関係性ができており、事業所への意見、要望の内容を職員間で共有してケアを提供している。さらに利用者の日頃の何気ない仕草や表情から利用者の思いを把握するようにしている。	

事業所名 : グループホーム えがおの花大釜(すみれ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的な会議のほか、ふだんの業務の中で意見や提案があれば検討し、利用者や職員にとって良いものであれば取り入れるようにしている。	定期的な職員との面談の場は設けていないが、ユニット会議、必要時に相談にのるなど、随時職員の意見・要望を把握するよう努めている。職員から出された意見が具体的な業務に反映された事例もある。なお、管理者は、日頃の業務中でも必要により個別に相談にのっている。	職員の意向は随時確認しているが、今後計画的に職員との個別面談を年1回計画的に実施し、仕事上の悩み、研修のことなど把握する機会を設けることが望まれます。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	キャリアアップの為の資格所得の際の費用の補助や研修受講、施設からの研修案内などをし、受講の際は業務上の配慮を行っている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	計画作成の職員がケアマネジャーの研修には参加したが、職員不足やコロナなどもあり積極的に参加はできなかった		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者はオレンジカフェなどで他事業所の方と情報交換などは出来ているが、施設訪問までは行っていない		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の話聞き、できる範囲で力を貸すよう努めている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	毎月の担当からのお手紙や、電話などの際にもお話し関係づくりに努めている		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム えがおの花大釜(すみれ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご家族様ともお話しをして、職員、ケアマネジャーが情報共有をしてスムーズに行えるようにしている		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の出来ることをしていただきながら、出来ないことは援助させていただいているという気持ちでいる		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	お手紙を送る際に写真なども同封したり、面会に出来ないような時は電話でお話していただいたりしている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会や連絡がない方とはなかなか取れていないが、昔から行われているチャグチャグ馬っこなどは見学に出かけたりはした	コロナ禍以降、外出や友人の来訪等が難しい状況にある。なお、定期的に来訪していたボランティアについて、今後再開の時期を検討することとしている。利用者への手紙などには職員も手伝い対応している。訪問理容師が2か月に1回訪れており、馴染みの関係になっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事の席は決まっているが、ソファは自由に座れるので気持ちよく過ごせるよう努めている		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去された際に病院に入院している際などはご家族様とも連絡を取ったりはすることもありますが、他の施設に移られた際はこちらからは積極的には行っていない		

事業所名 : グループホーム えがおの花大釜(すみれ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意見や要望を聞きながら、間違いなどを否定せず話を聞くようにしている	意志表示をできる利用者が少ないため、職員は日頃の何気ない表情や動作からその人の思いを読み取ったり、選択肢を用意し問いかける等、利用者の状況に応じて対応している。把握した内容は24時間シートに記載し、職員間で情報共有した上で、利用者の意に沿ったケアができるよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時にご家族様などから頂いた情報をもとに職員間で共有し努めている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	24時間シートを活用し、職員間で送りを行い共有し努めている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご家族様、ご本人様とお話しし、毎月のユニット会議などで各利用者様についてのケアを検討し介護計画の作成を行っている	入居直後に計画作成担当者が作成した介護計画を原則3か月ごと、その後、6か月ごとに見直している。モニタリングは職員全員で行い、月1回のユニット会議での情報交換、日々の記録、24時間シート、かかりつけ医の情報などから利用者の状況を整理しケアのあり方を検討している。その上で居室担当者を通し家族の要望を踏まえケアプランを見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別に支援記録を残し、職員間で情報共有をしている		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日々変わる状況に接しサービスを行っているが、利用者様やご家族様が満足されるサービスは出来ないこともある		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム えがおの花大釜(すみれ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	相談員の受け入れなどはしているが、利用者の方の状態などを考えると積極的に外部に出たりすることはしていない		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	施設での状態を手紙などにして、通院の際に報告している	ほとんどの利用者が従来の医師をかかりつけ医とすることが多い。家族同行の受診の際は、通院メモ、バイタルチェック表により日頃の利用者の状況を伝えている。処方箋は事業所からファックスで依頼し、薬剤師が来訪の上で具体的に説明を受けることもある。両ユニット合わせて4名が通院できない状況にあることから、訪問診療を受けている。なお、インフルエンザ、コロナ予防接種は近隣の開業医の協力を得ている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問看護さんに相談、アドバイスを受け医療的な行為はしていただいている。緊急時や、夜間も対応していただける体制をとっている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	所長やケアマネージャーなどが窓口となり行っている		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご家族様とも話し合い、施設で行えることなどを理解していただいている	利用契約時に終末期の延命治療を望むか否かについて「家族意向書」を提出して貰っている。また、重度化した場合、事業所では体制上対応ができないため、他施設へ入居となる旨、利用者と家族に説明し了承を得ている。そのような段階になった場合には、周辺施設や病院のリストを家族に提供し、意向を確認しながら、家族の支援を心掛けている。事業所開設以降両ユニット合わせて2名の看取りを行っている。	

事業所名 : グループホーム えがおの花大釜(すみれ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアル等はあるが、実際に急変した際は焦りと不安があった		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害が起こった際に地域の方々がどこまで協力してくれるか不安がある	訓練は年2回、火災訓練と夜間想定 of 通報訓練を実施している。第1避難所は事業所駐車場、第2避難所は近くのコンビニエンスストアとしている。コロナ禍以前は運営推進会議メンバーも参加して実施していたこともあり、地域の協力の必要性等を理解してもらう良い機会となっていた。なお、災害時の連絡先、マニュアルなどは事務室のよく見える場所に掲示している。非常時の対応については、事業所としても課題意識をもっており、今後関係機関と協議していくことが必要と考えている。	コロナ禍以前は訓練を運営推進会議開催時に実施していたこともあり、事業所の非常時の協力体制について検討する機会もあったとのことであり、今後再度地域との協力体制についてについて検討願いたい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉遣いなど気を付けているが、咄嗟の時などは不十分な時もある	プライバシーの確保、誇りを傷つけないケアをする上で、抑制するような言動はしないこと、トイレ誘導などで他者に聞かれたくない言葉は使わないことなど、職員全員一丸となって日頃のケアを行っている。また不適切な声かけ等があった場合には職員相互の注意喚起、ユニット会議での振り返り等を行い、「利用者がどう受け止めるか」の視点に立って改善に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	認知機能の状態を見ながら本人を尊重し自己決定できるよう努めている		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人のペースを大事にしているが、施設側の都合を優先してしまう時もある		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時に見せながら選ぶようにしている		



令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム えがおの花大釜(すみれ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	栄養面や味付け、食べやすさなどは気を付けている。入居者様で現在一緒に準備ができる方がおらず、下膳など手伝って貰える方はいる	ユニット毎に献立ソフトを活用して職員が献立を作成し調理している。下膳やテーブル拭きは利用者にもお手伝いしてもらう。食材には事業所の畑で収穫された野菜や家族からのおすそ分け野菜も活用され、新鮮な野菜が彩る時期もある。特別食には、お寿司やお店からお弁当の取り寄せ、誕生会では利用者の希望を生かしたものを提供するなどの工夫をしている。また体重変化をみながら食事量を考え、体調管理に気を付けるようにしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分をなかなか摂らない方などは、食事やお茶、おやつ以外の時間以外にも少量ずつ摂取してもらったりなどしている		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアと就寝時の義歯の洗浄のケアを行っている		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自立している方以外は、食前食後や時間で声かけをして誘導しているが失禁している方もいる	利用者全員をトイレに誘導している。夜間のポータブルトイレ利用者は両ユニット合わせ3名。また、現在両ユニット14名中4名が自立している。個々の24時間シートには排泄状況もチェックされており、その個人の排泄パターンと表情や仕草から判断し、トイレ誘導を行っている。便秘傾向の利用者には医師、薬剤師と相談しながら、下剤調整を行っている。また、必要により訪問看護師に浣腸を依頼することもある。ヨーグルト、牛乳を提供するとともに、食事の間の水分補給、や体操を行い、便秘予防に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況を把握し、水分量や服薬の調整を行っている		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム えがおの花大釜(すみれ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	日程や時間帯は決めているが、本人の体調や外出などの状況で変更するときもある	入浴は週2回を原則としているが、その日の利用者の体調、気分等により変更することもある、なお通院の前日には入浴できるように配慮している。入浴は全身観察の貴重な時間であり、入浴時の職員との会話、全身状況を職員間で情報共有するようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼夜逆転にならない方などは、日中寝たい際などお部屋で休んでいただいている。ソファで眠そうにしている方なども居室に誘導するが、居室では休まれず直ぐに出てきてしまう方もいる		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬情報を職員で共有し、服薬の仕方についても粉碎やとろみを使用したりしながら努めている		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	テレビでのど自慢や時代劇、パズルや塗り絵など好きなことをしながら過ごしてもらっている。皆でラジオ体操やごぼう先生の体操なども行っている		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日などはベランダに出たり畑を見に行ったりはするが、通院以外の外出はなかなか来ていない	御所湖方面へのドライブや、チャグチャグ馬っこの事前イベントの見学に出かけたり、ホーム敷地内の畑で野菜植え、ベランダでの外気浴など、できるだけ外の空気に触れる機会を設けるようにしている。なお、医療機関受診時に家族と出かけることも貴重な外出の機会であり、利用者にとって楽しい時間となっている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族様の要望もあり基本は本人がお金は持たず、日用品や薬代、床屋代などを施設が預り金から支払いをしている。自分でお金を持たないと落ち着かない方もいるが、持っているので安心して使うことはない		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	お電話が来た際は取次したり、お誕生日や母の日などプレゼントが届いたときは連絡したりしている。お手紙が来た際は返事を書く手伝いをしたり、年賀状も送ったりしている		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム えがおの花大釜(すみれ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	温度、湿度の管理は気を付けている。季節ごとの装飾をホールに飾り付けるようにしている	24時間換気をしている。また日中も定期的に窓を開け換気している。居間兼食堂は広々として明るく、テーブル、椅子の他にテレビを囲んでソファがあり、テレビを見るなどゆっくり過ごすことのできる居心地の良い空間となっている。季節の変化を感じてもらえるように、壁面には利用者職員による作品を掲示している。事業所内掃除は職員が中心になり行うが、利用者が手伝うこともある。共有空間は喧騒感がなくゆったりとしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人一人が過ごしやすいように座れ、隣同士とも会話ができるようにしている		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	なるべく自宅で使ったものなども持ってきていただくようにしている。ご家族の写真なども飾ったりしている	各居室には、ベッド、クローゼット、洗面台、エアコン、加湿器を備え、テレビ、写真、さらには使い慣れたお茶碗、箸、マグカップなどを持ち込む利用者もいる。居室入り口には表札の代わりにメモリアルボックスを設け、お気に入りの品、写真、マスコット人形、名前等を書き込み、その人らしさを表すよう工夫されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室などに名前を貼りわかるようにしている。食卓などがわからなくなる方には席にも名前を付けている		